



特殊能力



川崎ゆきお

暑い盛り、木陰の続く道を散歩していた田村だが、歩き疲れたのか、歩道脇にあるベンチに腰掛けた。といっても誰かが捨ててあった椅子を、そこに持ち出したのだろう。その当人の専用椅子かもしれないが、常にそこにいるわけではない。

先ほど坂を上がったとき、息が切れてしまったので、仕方なく休憩することにした。冬場はそんなことはない。真夏の数日に限られる。それも夏が少し過ぎたあたりの疲れが溜まる頃に。

セミが鳴き出してからしばらく経つ。そろそろ別のセミの音色に変わる頃だろう。今はジージーと甲高い鳴き声で、鼓膜がどうかしそうなほどだ。

その鼓膜がおかしくなったのか、一瞬音が聞こえなくなった。セミが鳴き止んだのだ。

ふっと顔を起こすと、黒い人が歩いている。田村と同じ年配だ。同じように散歩で歩いているのだろう。その黒い男は無声映画のように通り過ぎる。するとセミが鳴き出した。

もしや、と思い、田村は黒い男の背中に声をかけた。

「何か」

「セミが鳴き止みましたねえ」

田村はもしやと思ったのは特殊なことで、それに気付く人など滅多にいない。しかし、確かにセミが鳴き止んだのだ。これは偶然かもしれない。それで声をかけ、黒い男に近付いた。すると蝉が鳴いていない。

「やはり」

「セミでしょ」

「そうです」

「亀もです」

「亀」

「甲羅干しをしている亀が水に飛び込みます」

「ああ、亀は臆病ですから」

「蚊に刺されたことはありません」

「はいはい」

「分かります？」

「何となく」

「じゃ、あなたも」

「私はそこまで強くはありません」

「強い？」

「波長のようなものです」

「ああ」

「それが分かるのでしょうかねえ、セミや亀が。犬は何ともありません」

「猫は」

「まあ、逃げる猫は逃げますが、逃げない猫は逃げない」

「大きさです」

「そうだと思います。大きい目の亀が限界のようです」

「あなたも妙な波長を出しているので、安心しました」

「弱いですが、わずかにその傾向があります」

「これが超能力ならいいのですがねえ」

「そうなんです。何の役にも立ちません」

「しかし、蚊に刺されなくていい」

「私は蚊に刺されます。これも大きさに関係しているのでしょうかねえ。小さすぎると逆に効きません」

「私もですよ。蟻は逃げませんから」

「はいはい」

「しかし」

「はい」

「あなたと同じで、何の役にも立ちません」

「そうですねえ。私もセミの鳴き声が止められるならいいのですが、効きません。大きさよりも、タイプによるのかもしれませんが」

「例えば」

「蝶々が寄ってきます。蛾も」

「ほう」

「付いてくるのです」

「逃げないで」

「はい、しばらく同行したりしますよ。これも大きさには関係ないようです。でも、こういうの、役立ちませんから、それ以上調べていませんがね」

「そうですねえ、希有な能力があっても使い道がないと何ともなりません」

「はい、お互いに」

黒い男はそのまま歩き去った。きっと周囲何メートルかのセミは順次鳴き止んでいるのだろう。台風の眼に入ったように。

了